

51章は40~55章の著者である第二イザヤがバビロンにいる人たちに向かって、エルサレムに帰ろうと励ましている言葉です。直前の3節で、第二イザヤは廃墟となったエルサレムに神さまの裁き、怒りの現れを見えています。しかし、怒りを現された神さまが、「慰めるもの」としてエルサレムに臨まれるのです(12節)。4節で、第二イザヤは神さまの語る言葉と神さまが創り出す秩序が全ての国民の導きの光であると語ります。神さまが本来の正しい関係を与えてくださる、救われるのです。そして、この救いは一時的なものではなく、永遠なのです。でも、現実には人々はまだバビロンにいるのですから、多くの人たちは第二イザヤのこの言葉に全く納得しませんでした。7節に記されているように、この言葉を信じた人たちはバビロニア人たちによって、仲間のユダヤ人たちによってさえ、嘲られたり、ののしられたりしました。しかし、第二イザヤは神さまの言葉を聴く真のイスラエルは救われるが、それ以外の者はしみに食われる衣、虫に食い尽くされる羊毛のように滅ぼされるのだ、と語るのです。

そして、創造の日と出エジプトというイスラエルの歴史における二つの大きな場面で神さまが働かれたように、今バビロンからの脱出・祖国への帰還が神さまの贖いによってなされるのが、11節で喜びをもって告げられるのです。「贖う」という言葉は元々イスラエルの古い法律の用語です。土地は「嗣業の地」、神さまのものであり、人々はその土地に寄留し、滞在する者に過ぎないため、誰かが貧しくなって土地を売った場合、親戚がそれを買い戻す行為をしなければなりません。また、貧しい人が身売りして誰かの奴隷になった場合、その人の兄弟や血縁者がその人を買戻すことができるのです。このように土地や人などを買い戻すことを「贖い」と言いました。バビロンに捕囚となった人たちが神さまによって買い戻されるのです。ここでは、出エジプトの奇跡に触れてバビロンからの解放とエジプトからの脱出とが重ねて語られています。

私たちがイエスのご降誕を思う時、そして原始エルサレム教会の復活信仰告白の言葉(一コリ 15:3~5)を思い起こす時、第二イザヤの言葉は新たな響きをもって迫ってきます。初代教会の人たちは第二イザヤを通して語られた神さまの民への慰めとエルサレムの贖いは後の日にイエスの生涯と十字架の死を通して完全に現されたと理解したのです。イエスの十字架の死によって、私たちは贖われ、神さまのものでされたのです。例えば、ヨハネの手紙一 2:2 にはイエス・キリストについて「この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」と記されています。